

## 越後：飯士山・負欠スラブ

- ◆日程 2022年6月11日(土)
- ◆メンバー L: HY、IZ
- ◆天候 晴れのち雨

スラブということばを(クライミングウォールのジャンルではなく)初めて知ったのは2019年4月の奥利根だった。こういう豪雪地帯には雪に磨かれた一枚岩があってそれをスラブと呼ぶと。負欠スラブは2019年6月原生林の山行報告がとにかく魅力的に思っていた。

そんな楽しみにしていた初めてのスラブ、登るのもトラバースも藪漕ぎも下りの急坂もすべてビビりまくりで、すべての行程においてHYさんの想定の倍はかかっていたと思う。

HYさんはラバーソールの沢靴、わたしはFIVE TENのクライミングシューズ‘スパイア’を装着。摩擦が最大限になる足裏全体のスメアリングで歩くのが最も合理的と頭ではわかりながら、つい小さな突起を探しエッジングしたくなり岩と自分の足・シューズを信じていないんだなーと我ながら反省した。登る対象=山に自分を合わせていく必要、そうすることで山も岩も自分を受け容れ登らせてくれるように感じ、できないながらもそれがものすごく面白く思えた。

身一つでスラブをのぼるのは、ある種「フリーソロ」なわけで、前述の原生林にHNさんが書いた、「足を滑らせたとしても止まれるが、転がったら止まらない」・・・一番怖いのは、ザックの重みのある背中側に転がること、そうするとまず止まらず数百メートル加速していくのみ。前向きに滑れば、体の前面は擦り傷だらけになるだろうがおそらく命まで取られることはない。とその意味が解った。

尾根に出る際も「弱点を突くだけ」。この藪は上から迫ってくる枝々に、頭が出て肩が抜けない、登ってもくぐってもがんじがらめになる恐怖があり、遭難や過酷なレースで多くの人は幻覚を見るようだが、極限状況では枝が人の手に見えてわたしは錯乱するんだろうなと恐ろしい想像をした。例会でのHYさんのコメント「豪雪地帯の藪は下向きに流れる」で、腑に落ちた。初めての藪漕ぎの感想は「いままでいかに、人の作った道があるいてきたのか・・・」である。

ずっと岩を目にし緊張していたので、西峰から東峰に向かう鞍部の森の緑に癒され、この日初めてほっとした。それもつかの間、かなり時間を使ってしまったために雨に追いつかれ雷が聞こえ始め、山頂で昼食大休止の予定も即下山にとりかかった。キツイ傾斜で全く気が抜けず、スラブの基部を横切る美しいブナの森に入ったときも、心からほっとした。

下山路でもう一つスラブ入り口を見つけ、どうやらわれわれが取りついたよりもっと下からスラブを大満喫できるようだった。前述のHNさんの報告にもあったのだが3年前と結局同じルートをとったことになり「じゃあまた来ないと一まあ毎年来てもいいんだけど」とのことなので、スラブに行きたくなったみなさん、今年の10月もしくは来年の5-6月にぜひ！！

雪の降っていない時期に深い雪を感じる、充実した山行だった。終了後の散策で、コシアブラだけは見分けられるようになったと思う。HYさんに本当に感謝。(記: IZ)

CT: 駐車場9:25 - スラブとりつき10:15/10:35 - 尾根12:25 - 山頂12:55/13:10 -  
駐車場14:30

